

活動的でおおらかな
玉木さん

玉木さんとの出会いは平成17年の夏でした。当時、娘さんと孫2人の4人暮らし。性格は几帳面で、一方で歌や踊りが大好きなおおらかな面もおもちの方です。誰よりも遅く寝て、誰よりも早く起き、家の中の仕事は手際よくこなし、子供の服は生地を織って作られていたそうです。食事はさつとすませ、すぐに次のことに取りかかり、動いていない時間はないくらいに一日一日を過ごされていきました。女が家を空けることは良しとせず、とにかく自分の楽しみのために時間を使うことなく過ごしてこられました。

通所リハビリへ



当時、玉木さんは自宅で足の

認知症の人が
最期まで「生ききる」暮らしの支え方 +6+

自分の力で 生ききる姿

「親の意見と茄子の花は真に一つの嘘はない」
この言葉は、僕が玉木さん(仮名)から教えていただいた言葉です。
たくさんの歌を聞かせてくれた玉木さん。
今はほとんど言葉を発することはできなくなってしまいました。

文 | 黒岩 尚文 (共生ホーム よかあんべ 代表)

しびれを訴え、そうすると落ち着かなくなり、足を温めると治るようで、足浴を1日に何度も何度も繰り返していました。娘さんも玉木さんの言葉を一生懸命受け入れようとされていました。2度3度と何度も同じことを繰り返すので、イライラさしていました。娘さんは、まずその足のしびれが治れば落ち着かない状況もなくなると考え、通

所リハビリ事業所を利用し始めました。初めは「楽しかった」と帰ってこられ、心配していた大勢での入浴も、「歩く運動」と言っても歩行浴もできました。
しかし、家族は、ただでさえ人に気を遣うのに、風船バレーやレクリエーションをすることで、余計に緊張してしまうのではないかと不安に思っていました。実際、少し経ってから、デイケアから帰

宅後、ハイテンションでしゃべり続けている状態が見られるようになり、家族の新たな悩みとなりました。また、デイケアに行くたびに、「玉木といえます。加治木町から来ました。初めまして」と挨拶をして回り、他の利用者は違和感を覚えていたようです。

自宅での生活

それから間もなく、玉木さんは夜中に怒って家の中をうろろされるようになりました。娘さんはその状態を「ギレた!」と表現し、下を向き、疲れきった表情で「もう疲れました」とぽつりと言われました。その時は、自宅での介護の限界を感じ、施設入所も考えたようです。でも、「施設に入ったら婆ちゃんが婆ちゃんになくなってしまおう」と、娘さんは自分の役割を果たそうと、お母さんと向き合い続けました。

その後も、僕たちの事業所の泊りや通いを利用していききました。僕らの事業所を利用される時も、足のしびれを訴えイライラしたり、「タクシーで帰る」と荷物を持って外に出たり、常に落ち着

いているとはいえませんでした。

明け方自宅からいなくなり、警察の厄介になったこともあり。しかし、どんな状態の時でも、そばにいて話を聞くことができるスタッフ、何より家に帰ると「おかえりなさい」と笑顔で迎えてくれる家族がいることが、玉木さんの日常となりました。娘さんも「喧嘩しながらの毎日ですけど、今が一番楽。安心できるもの」と優しい笑顔で言ってくださるようになりました。その時、僕らは、

何より安心できる居場所が家族の中にあることで、玉木さんの自宅での暮らしを支えていけるのだと実感しました。

それから、玉木さんも娘さんも苦しい時期が幾度となくありながら、いつも離れることなくずっと一緒に過ごしてきました。

突然の出来事…

そして、昨年の5月11日大きな出来事がありました。自宅で意識消失。娘さんから連絡を受け、たまたま近所に往診中のかかりつけの先生が駆けつけ、救急病院に搬送されました。脳梗塞です。右上下肢に麻痺があり、集中治療

室に運ばれた玉木さんの身体に、次々と点滴や自動血圧計など多くの医療器材が取りつけられていきました。これまで大きなしっかりした声で島唄を歌っていた玉木さんはぐったりとして、声をかけても反応がありません。そばにいた僕たちはこれまでと全く違う姿に不安を感じました。

救急病院の担当医から入院の手続きをするように家族は告げられました。娘さんは、その指示に従い、書類を書き始めました。その時です。それまでぐったりしていた玉木さんが全身の力を振り絞り、起き上がろう、起き上がるうとしていたのです。それを見た看護師さんはもう一枚の書類のサインを求めました。「抑制承諾書」です。その時、娘さんは明らかに戸惑いの表情をみせました。

病院から 小規模多機能へ

「婆ちゃん病院が嫌いだから……」

「ですよ。玉木さんは病院嫌いですよね。帰りましょう」と僕は娘さんに告げ、すぐかかりつけの先生に電話をしました。

「先生、玉木さんが起き上がる

う、起き上がろうとしています。娘さんもこのままの入院をとっても不安に思っています。事業所に連れて帰って良いですか？」

「よし、わかった。大丈夫だ。連れて帰れば良いよ。みんなで見ている」と力強くおっしゃっていただきました。

玉木さんは、集中治療室から病室に行くことなく、点滴を付けたまま、いつもの送迎車に乗り事業所に帰りました。僕らの事業所は病院ではなく、単なる小規模多機能事業所です。高度な医療器材はもちろんありません。ご家族、スタッフはもちろん、これまで一緒に時間を過ごしてきた利用者の方々も玉木さんを支えてくださいました。一生懸命声をかけてくれました。ある利用者は玉木さんの側にずっと寄り

添い、手を握り続けてくださいました。隣町にある同じ会社の事業所の利用者、スタッフも大勢で駆けつけ、玉木さんが元気になってくれるように島唄を歌ったり鹿兒島のおはら節を歌って賑やかに踊ったりしてくれました。みんなの願いが玉木さんに届いたのでしよう。玉木さんは凄い回復力で見事に復活しました。



玉木さんは今年2月で97歳になりました。言葉は出なくなり、以前のような歌声を聞くことはできなくなりました。職員の介助を受けながら、食事を口から食べ、娘さんの作られた特製ジュースを毎日飲んでいきます。「認知症は長寿社会ゆえの長生きの褒美。介護は自分の為、認知症になつたから一緒に過ごせる母への恩返し」と娘さんはおっしゃいます。玉木さんは、お話はできませんが、事業所の中に、家族の中にしっかりと存在感があります。僕の事業所の理念に「その人らしく最期まで生ききる暮らしを支援する」という言葉があります。まさに玉木さんは、自分の力で生ききる姿を僕らに示してくださっているのです。

